

# BIBLIOTHECA

Nihon University Mishima Campus

日本大学国際関係学部・短期大学部（三島校舎）

No. 11  
2015.10

## 資料探索について 思うこと



国際関係学部 国際教養学科  
教授 田中 徳一

ある時、ゼミで国立国会図書館をガイド付きで見学した後、感想を書いてもらったことがある。大方の学生が「システムチックだけど、自由に書庫に入れず、調査・研究向きの図書館」という印象を受け、少し戸惑いを感じたらしい。規模の大小は別として昔と違い、今の学生は、自由に書庫に入れる開架式の図書館に慣れているのだろう。しかし見学ではなく、実際に利用した学生に聞いてみると、「どんな資料も揃っていて、こんなに便利なところとは知らなかった。一日中ここに居たいと思った」と感激の言葉を漏らした。その学生は問題意識を持って資料を探索することがどれほど楽しいことか、初めて知ったようなのだ。私が資料を探索して楽しいのは、この学生の気持と変わらない。

私は比較演劇史が専門で、特に日本の演劇が海外でどのように刺激を与え、受容されたのかを研究している。演劇は表現と受容が同時で、その場で消え去り、あとに実体が残らない。それは今しがた上演し終わったものも、200年前に上演されたものも変わらない。演劇研究は過去のもの扱う限り、歴史的にならざるを得ないのだ。そして過去の演劇を研究するには、それを実際に見た人の記録や批評に拠るしかない（映画・ビデオ・DVD等の利用はここ数十年の一部の公演に限定される）。そうすると、当時の新聞・雑誌が重要かつ有力な資料であることがわかる。演劇ばかりでなく、およそ近代の文化史を研究する限り、新聞・雑誌は過去を

検証する最も有力な資料の一つになり得るだろう。

20年ほど前のこと。今では知る人もいないが、1930年から翌年にかけて1年3ヵ月、世界恐慌の最中に欧米22ヵ国を巡って反響を呼んだ日本の役者、筒井徳二郎に関心を持った。ドイツの重要な演劇人ブレヒトも刺激を受けたらしいことを知ったからだ。当時、パリ公演やベルリン公演について若干の研究報告はあったが、この人物の経歴や海外巡業全体について先行研究と呼べるものは皆無だった。そこで図書館で調べるだけでは不十分と考え、この役者が公演して巡った国内及び海外各地に足を運び、さらには関係者も訪ねて聞き取りを行うというように、資料調査とフィールドワークを繰り返すことにした。

まず経歴であるが、新聞の芸能欄や芝居番付を調査することで、明治・大正・昭和と活動した新派・剣劇役者であることが明らかになっていった。ある時、帰国時の新聞記事で、大阪材木商の息子だったことを知り、商工名鑑、土地台帳等を調べ、さらに墓石も調べて、子孫筋にたどり着き、戸籍簿も入手できた。しかしこの種の調査で決定的に不利な条件として、筒井の海外巡業には日記のような記録が残されていないのだ。そこで、外務省外交史料館所蔵の旅券下付一覧に記載されている渡航者の本名と本籍をもとに、全国の電話帳に当たって元座員（当時1人存命）や遺族を捜し出し、協力を請うことにした。そして彼らから提供頂いた旅券やホテル・



▲ タリンのエストニア国立図書館  
(石造りで要塞のような威容を誇る)

ステッカー、私信や日付入りの写真等を抛り所に、22ヵ国巡業の足跡をたどり、海外調査を重ねていった。その結果、今日までに欧米各地約50ヵ所の図書館・資料館から新聞記事やプログラム等、19言語にわたる関係資料を入手することができた。

このように書くと、調査がとんとん拍子に進んだように見えるが、実際は空振りが多かった。しかし消去法で、他を探せということだと受け取り、それも収穫と考えた。20年前はまだ国内も海外も図書目録カードで資料を探すのが一般的だった。海外調査を始めた頃、「戦争のため紛失」という記載に度々出会い、文化財を破壊する戦争をうらめしく思ったものだ。筒井の巡業日記は残されていないと書いたが、実は帰国後、「六感の旅」という紀行文を『夕刊大阪新聞』（『産経新聞』の母体）に連載していたのである。やはり戦争ゆえか、その新聞が創刊号からすべて失われてしまっていることを知って愕然とした。

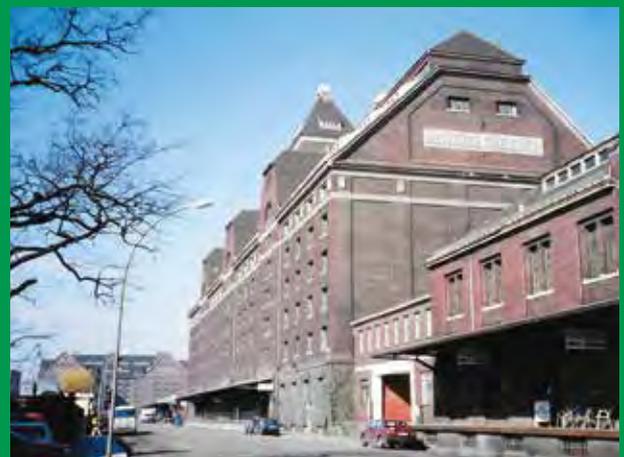
にもかかわらずである、戦前の資料をよくぞここまで残してくれたものと、国内外の多くの図書館の努力に感謝している。ヨーロッパ諸都市は第二次大戦で甚大な被害を被ったのに、意外に戦前の資料がしっかりと保管されていた。資料疎開によって戦禍を免れたからだと聞く。例えば徹底的に破壊されたベルリンだが、筒井一座に関して21タイトルの新聞、約40点の関係記事が残っていたのである（一都市として最多）。同様に戦禍の大きかったワルシャワでも、一座の反響を跡付けるに足る資料が見つかった。その他、ロンドンやパリ等の西欧主要都市はもとより、北欧・南欧・東欧の諸都市から、ロシアに近いバルト沿岸都市に至るまで数多くの図書館において、一座の足跡をたどることができた。

海外の図書館を訪ねる際、よく日本からファックスや電子メールを送っていた。タリンのエストニア国立図書館では、

館員がエストニア語の新聞記事をすべてリストアップして待っていてくれたのには感激した。またブカレストのルーマニア・アカデミー図書館でも同様だった。一つだけ調査の遅れた地域があった。ソ連崩壊後、バルカン諸国は民族主義勃興によって紛争地域と化した。そのため調査を諦めかけていたが、紛争が落ち着いた頃に問い合わせしてみたところ、セルビア、クロアチア、スロベニアの各国立図書館が非常に好意的に協力してくれた。これらはほんの一部の例に過ぎない。海外の多数の図書館が、かつての文化交流を思い、自らも身をもって実践してくれたのである。

資料探索について日頃思っていることがある。あくまでも実証的研究の場合だが、資料は何も身近にある必要はない。日本のどこかに、さらに言えば、世界のどこかに存在していることがわかるだけでよい。所在がわかれば、図書館から取り寄せるか、それが叶わないなら、遠くてもその場所に足を運ぶことで入手できる。その点、現在は資料のデジタル化が進んでいるので、インターネットで所在を確かめ、資料を入手することが、以前に比べ格段に容易になった。私も恩恵に与かっている。

しかしここに落とし穴がありそうだ。それで調査ができたように思いがちであるが、情報化がどれだけ進展しても、所詮、オンラインで検索できる資料は限られている。逆説的だが、今後はいよいよそのような機械的方法だけでは探し出せない、一昔前までと同様、根気と情熱と想像力によって発掘しなければならないような資料でこそ、研究の成果が問われることになるのではないかという気がしている。調査研究にとって重要な資料とは、依然として海底に埋もれている希少資源のようなものではないだろうか。いずれにせよ資料探索はこれからも冒険とロマンであり続けるにちがいない。



▲ ベルリン国立図書館新聞部門  
(ヴェストハーフェン港の旧穀物貯蔵庫を使用している)

## ESSAY

## 図書館には人生の教科書が溢れている

国際総合政策学科 水野 和夫

図書館に行けば、行きたいと思う時代と場所に自由にタイムスリップすることができる。

2500年前の紀元前5世紀、ギリシャとトロイアの戦いで何が起きていたか、あるいは異なる宗教をもつ民族と出会ったとき、つまり今でいうグローバル化の時代、人々はどう対処したか、エウリピデスの『トロイアの女』や『バックスの女』に答えがある。

中世から近代へと秩序が大きく変わった「長い16世紀」(1450～1650年)、その大激動期に人間の葛藤や社会のありかたがどう変わったか、シェイクスピアの『リア王』や『ベニスの商人』を読むと、人間のおろかさや強欲さは今と本質的には変わらないことが理解できる。

フランス革命が起きて圧政から開放された人々が希望に満ちた社会が到来するはずだと期待していた19世紀、現実はずっと違っていたが、バルザックの『ゴリオ爺さん』やフィスの『椿姫』を読めば、必ずしも恵まれない階層に生きた人が自分の意思に従って懸命に生きようとしていたことがわかり、今の自分の境遇がどんなに辛くても勇気と希望が沸いてくる。

これら三つの時代は、いわば「歴史の危機」だった。既存の秩序が崩壊しているが、次の時代のあるべきシステムはまったく見えないのである。人間は秩序なしでは耐えられないというが、秩序が崩壊した時代に生きなければならぬ世代もある。一旦、「歴史の危機」

に入ると、それから脱出するには最低でも1世紀を要するからである。21世紀が2001年の9・11(米国同時多発テロ)で幕を開けたように、現在も「歴史の危機」の真っ只中にあるようだ。

そう考えると、自分の人生は不幸だと考えるかもしれないが、そうではない。『中世の秋』(ホイジンガ)によれば、人の幸せ、不幸せの総量はいつの時代も変わらないという。ホイジンガを信ずれば、むしろ21世紀に生まれた人は人類20万年史のなかで最もワクワクする時代に生まれたということになる。今生きている人はだれもが21世紀のエウリピデス、シェイクスピアになれるチャンスを持っているからである。

とりわけ若い人にはその可能性が高い。大学でひとつの学問、たとえば経済学だけを習得したからといってそれで満足してはならない。「歴史の危機」においては、これまでよしとされてきたことがそうではなくなっていくから、いかに生きるかその姿勢が問われる。経済学の始祖であるアダム・スミスが経済学のみならず、道徳学、倫理学、法学を極めたように、なにをするにしても自分で判断を迫られるのである。

学生時代を除けばじっくりと腰をすえて古典を読めるときはない。古典を100冊読めば、今後どんな事態に直面したときにも困ることはない。答えは古典のなかにあるからである。古典はそうした「歴史の危機」に書かれたものばかりだから、人生の教科書なのである。

## ESSAY

## The House With Many Doors

ビジネス教養学科 Kinsella Valies

I believe that books are doors that open to those who wish to travel. When I was young I hated reading. I did however love listening to bedtime stories and the many tall tales shared by aunts and uncles at family gatherings. One day I moved far away from my family and was no longer able to hear their tearful stories or their raucous laughter. Months later I found myself in my neighborhood library looking for a book to help me write a report.

When a librarian saw me wandering through her maze of books, she recommended that I try reading: *Crusade in Jeans*, a Dutch children's book about time travel through history. I hated almost everything about it, since it featured too many historical facts and used many Dutch words that were still new to me. I did however fall in love with one of the main characters, a powerful girl who protected her friends.

Later I asked the librarian for another story by the same writer. As I struggled through the language barrier with the aid of dictionaries and encyclopedias my hopeful mother had bought for me years before, I realized there were a lot of

things I didn't know about the world around me. This made it especially difficult to understand fantasy and science-fiction stories. So back I went to the library to discover doors into science and history. Even though I did not understand everything at first, my interest in the fantasy and science-fiction genres continued growing. I devoured title after title until I discovered that some of my favorite films were based on books. Through reading, my all-time favorite characters from works such as *The Neverending Story* acquired more depth.

It's now the 21<sup>st</sup> century and I have my own digital library. Whether I want to venture through old doors or set out on new adventures, I simply tap the screen. The true power of a library is its ability to start you on a journey that will continue to shape you throughout your life. I am grateful to the librarian who led me to my first door. I would not be the person I am today without my old, neighborhood library.

## ● BOOKS WRITTEN BY FACULTY

本学部教員の  
刊行物紹介

## 「アラブの心臓」に何が起きているのか

青山 弘之 編 [岩波書店]  
横田 貴之 分担執筆

「アラブの心臓」をご存知だろうか？ 1950～60年代、民族革命を成就したエジプト、シリア、イラクなど東アラブ諸国の指導者が、自らを「アラブの盟主」と自負する際に用いた言葉である。東アラブ諸国は、中東地域の政治・経済・文化を牽引する「アラブの心臓」の役割を長年担ってきた。21世紀になると、湾岸諸国が経済発展を背景に「新しいアラブ」として存在感を増大させる一方、経済的停滞の続く東アラブ諸国は「古いアラブ」として擲論されるまでに凋落した。しかし、2010年末に始まった「アラブの春」は、「アラブの心臓」が中東情勢を理解する上で重要であることを再び示した。エジプトでの軍事クーデター、シリア内戦、「イスラーム国」の台頭、ガザでの軍事衝突など、「アラブの春」後の混乱は、多くが「アラブの心臓」で起こり、そして中東全域へ波及したのだ。「アラブの心臓」に深く切り込むことなく、現在の中東情勢の理解はできない。本書は、エジプト、シリア、イラク、レバノン、ヨルダン、パレスチナを事例に、中東地域の混迷の要因・背景を読み解いている。その分析に際しては、「独裁制は悪である」、「宗派対立がイスラーム国を生んだ」といった通俗的な言説を虚像として否定し、実像を読者に示すという手法がとられている。実像の分析から現れた中東情勢は、必ずや読者に新しい視点を与えることであろう。深く切り込んだ中東情勢の解説を求めている方々へ必読の書である。

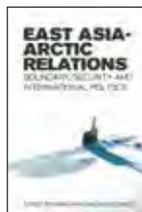


## Next教科書シリーズ教育心理学

和田 万紀 著 [弘文堂]  
伊坂 裕子 分担執筆

本書は、文字通り教育心理学のテキストとして企画された。教育心理学は、教育という事象を対象としている。人間は、他者との関わりを通して、直接的・間接的に、また、意識的・無意識的に、学習し、発達する存在である。したがって、教育心理学のカバーする範囲は極めて広い。本書は特に学校などの制度的教育に焦点をあて、教師を目指す人、また、教育の現場で心理学的な視点にたって問題解決に当たろうとする人の学習に役立つよう企画されている。そのため、奇をてらうことなく、基本的な理論や研究が学習できるように構成されている。

私が執筆を担当した章は、個人の発達の变化の要因や原理、発達の様子などを解説している。個人的な話になるが、私が博士後期課程のとき留学したクラーク大学は、教育心理学者の元祖といつてよいスタンレイ・ホールが初代学長を務めた。1880年～90年代に、ホールが使い、彼が足を置いて磨り減った跡が残るデスクが当時も保存され、講義室の一角に置かれていた。その横で、100年後の学生たちは研究への一歩を踏み出した。私にとって、教育心理学は、特別な思い入れのある分野である。発達の章を執筆するにあたっては、本書の企画意図に沿い、基本的な理論や研究を真面目に紹介することに努めた。加えて、ホールが目指したように、人間を理解する一つの視点として発達心理学的な視点を提供できるよう努めた。



## East Asia-Arctic Relations

Boundary, Security and International Politics

Edited by Kimie Hara, Ken Coates

[Centre for International Governance Innovation]

大西 富士夫 分担執筆

本書は、北極圏諸国とアジア諸国の国際関係を扱った12本の論考が収められたアンソロジーとなっている。近年、北極圏は現在の世界政治において最もダイナミックな国際関係の1つとなっており、そのダイナミクスを生み出しているのが、北極圏諸国とアジア諸国の国際関係である。筆者は日本に関する章を担当した。

北極におけるこうした国際関係の登場の背景には、気候変動による海水の著しい減少に伴って、北極海が氷に閉ざされた海から資源開発や商業航路等の経済的機会に恵まれた海に変容しつつあるといった事情がある。北極海はその周辺国だけに重要であるのみならず、アジア諸国等もその経済的機会を活用すべく北極海に進出しており、北極圏諸国とアジア諸国の間の新しい利害関係が形成されつつある。

中国、韓国と比べて若干の温度差はあるものの、日本も北極圏への進出を推進しつつあるアジア諸国の1つである。日本は、1990年代より国立極地研究所を中心に北極圏観測の国際協力に参画してきたが、近年、観測研究以外の分野でも北極圏への関与を強化してきた。日本政府は2013年には北極海ガバナンスの中心的フォーラムである北極評議会のオブザーバー国として承認されるとともに、それに合わせて北極大使を設置し、北極圏諸国との外交を強化している。また、北極の経済的可能性を見据えた官民連携協議会も設置されている。今後、国際的連携の下、科学観測で得た知見を商業的利益に結び付けていくことが日本政府にとって重要な政策課題となっている。



## 上田彦次郎ガラス乾板写真

～昭和30年ごろの伊豆と富士山～

日本大学国際関係学部図書館 編 [静岡新聞社]

平成23年、本学部図書館は、修善寺出身の絵はがき製作者で写真家の故上田彦次郎(1901-1984)が、昭和30年前後に伊豆半島や富士山等を撮影したガラス乾板約2000枚の寄贈を受けた。しかしながら、その乾板から焼いた写真がほとんどないばかりか、ガラス乾板が納められた紙箱の表には、温泉名などと記されているのみで、個々の撮影場所・時期を示す記録は一切ないというありさまであった。

そこで、平成24年から2年間に亘り、学内外の有識者18名からなるガラス乾板調査・公開ワーキンググループを立ち上げ、調査・研究を行った結果、多くの写真の撮影場所を特定することができた。また、昭和30年の伊豆の国立公園編入や昭和36年の伊豆急行線開通前後の写真が多いことから、撮影時期は概ね昭和30年前後であることがわかった。また、富士山の撮影に一生を捧げた写真家岡田紅陽と一緒に写る写真も発見され、岡田紅陽写真美術館の資料をあたった結果、岡田紅陽とは昭和18年頃から交流があったことも判明したのである。

本書は、図書館が中心となって平成24年から毎年開催してきた展示会において公開した写真から150点を厳選し、1冊の写真資料集として刊行したもので、絵はがきのもとになった原版をまとめた出版物としては他に例を見ないものである。

上田の写真は絵はがきにすることを前提に撮影されており、その計算しつくされた構図は巧みである。白黒のガラス乾板写真ならではの迫力と滑らかな階調の変化は圧巻で、昭和時代へとタイムスリップを味わうことができる。

## ● 本学部教員の共著など一覧

書名	著者名等	出版社
東方外交叢書(六) 東西方文化と外交方略比較 - 実践篇	魏 楚雄, 陳 泰林 編; 川口 智彦 分担執筆	澳門大学
中東・イスラーム諸国民主化ハンドブック 2014 第1巻 中東編	松本 弘 編; 横田 貴之 分担執筆	イスラーム地域研究 東京大学拠点
ムスリム同胞団の思想-ハサン・パンナー論考集	北澤 義之, 高岡 豊, 横田 貴之 共編訳	岩波書店
サハラ地域におけるイスラーム急進派の活動と資源紛争の研究 - 中東諸国とグローバルアクターとの相互関連の視座から	日本国際問題研究所 編; 横田 貴之 分担執筆	(公財) 日本国際問題研究所
グローバル戦略課題としての中東 - 2030年の見通しと対応	日本国際問題研究所 編; 横田 貴之 分担執筆	(公財) 日本国際問題研究所
『国際政治研究』『国際政治史』『国際時事問題』『安全保障論』	石田 勝之 編	新世代政経懇話会
アメリカ いきものがたり - 動物表象を読み解く	辻本 庸子, 福岡 和子 編; 井上 健 分担執筆	臨川書店
心理学概説 - 心理学のエッセンスを学ぶ	巖島 行雄, 横田 正夫 編; 伊坂 裕子 分担執筆	啓明出版
ゴマの機能と科学 (食物と健康の科学シリーズ)	並木 満夫, 福田 靖子, 田代 亨 編; 太田 尚子 分担執筆	朝倉書店

※ゴシック太字は本学部教員

## 所蔵資料紹介

## 幕末の西洋兵学書と江川坦庵

国際総合政策学科 浅川 道夫

本学部図書館の駿河文庫には、幕末期の日本において翻訳された西洋兵学書が写本・版本含め 25 種類 (51 冊) 収蔵されている。ここでは、同時期に政治・外交・軍事など多方面で活躍した、伊豆・葦山代官江川坦庵とゆかりのある資料 3 点を取り上げて紹介したい。

①に示した写本は、江川坦庵が嘉永年間に著した海防関係の建白書を収載するもので、嘉永3(1849)年6月の「豆州下田湊海防備向私存寄之趣申上候書付」と「豆州下田港御台場図書申上候書付」、嘉永2(1850)年7月の「存寄之儀申上候書付」など3通から成る。

江川坦庵は、イギリスの軍艦マリナー号が嘉永2年閏4月に下田へ来航するという事件に直面して以降、下田の防禦に関する建白書をいくつも著して幕閣に提出しており、この写本に収められているのはその一部である。

嘉永3年の建白書では下田の防禦について、「伊豆国御料所村々」からの運上金を以て海防の資金とし、下田港周辺に台場を2~3カ所造ることや、下田へ常駐する兵員の差出をしかるべき大名に命ずること、さらには在地の農兵を取立てて備えとすることを説いている。他方、嘉永2年の建白書では海防に必要な砲術・軍船・築城について具体的に説き、特に砲術に関しては天保12(1841)年に自身が免許の皆伝を得た「高島流砲術」を踏まえ、オランダ式火砲の種類・用法を詳細に記している。ちなみに建白書にある「十八ポンド長鉄製カノン」は、のちに葦山反射炉で製造が試みられたものである。

②の『海上砲具全図』は、蘭学者の杉田成卿らが翻訳した『海上砲具全書』(大野文庫蔵版、安政元・1854年刊)の附図として出版されたものである。原書はオランダのカルテン(Calten, J.N.)が著した *Leidraad bij het onderricht in de zee-artillerie* 一海上砲術の教育に関する指針 (Delft: B. Bruins, 1832) である。内容的には、前装滑腔砲(砲腔に旋条を有さず、球形砲弾を使用する火砲)段階の軍事技術にもとづいて、火砲の種類や操砲・射撃法のほか、それらを配置する砲台について解説した砲術教本ということができる。

江川坦庵は、嘉永2(1849)年6月に表した下田防禦に関する前出の建白書中で「カルテンと申す西洋人著述之書」に触れており、さらに嘉永6(1853)年の品川台場設計にあたって、「台場築造に用いた西洋書籍」のひとつに「ゼイアルチルレリ」を挙げている。ちなみに『海上砲具全書』は、天保13(1842)年に翻訳が完成したのち写本の形で流布されたといわれ、葦山の江川文庫にもその写本が伝存している。おそらく同書は、品川台場に配置する火砲の選定にあたって活用されたものと思われる。

③の『歩兵運動軌範』は、江川家の管下にあった縄武館から、安政4(1857)年に刊行された歩兵教練書である。原書は *Reglement op de exercitien en manoeuvres der infanterie* 一歩兵の訓練と機動に関する教則 (Breda: Koninklijke akademie voor de zee-en landmagt, 1855-56) で、当時日本でゲベル銃と呼ばれていた雷管式の前装滑腔銃(Percussie geweer)に対応する、歩兵の訓練法や戦法について書かれている。翻訳にあたったのは、嘉永6年に江川家に召し抱えられ、のち「御鉄砲方附手代教示方兼蘭書翻訳方」として兵学書の邦訳作業に従事した石井脩三である。

もともと『歩兵運動軌範』は、第一篇「歩卒学校編(Soldatenschool)」・第二篇「小隊学校編(Pelotonsschool)」・第三編「大隊学校編(Bataillonsschool)」・第四編「連隊学校編(Linieschool)」の四篇構成であったとされるが、駿河文庫に架蔵されているのは第二編と第三編だけである。なお第一篇と第四編は未刊との説もあり、後考を俟ちたい。

同書の内容で注目されるのは、江川坦庵が苦心の末考案した日本語の号令が使用されていることであろう。幕末の日本に西洋式軍事教練導入の契機をつくった高島流「西洋銃陣」では、号令をすべてオランダ語でかけるようになっていた。これを修得した江川坦庵は、号令を日本語の「下知言葉」として定着させることを図り、現在まで使われている号令の原形となるものを作りだした。それらのいくつかを次に示すが、現代の号令に比べるとやや違和感がある点に、試行錯誤の痕跡をみることができよう。

ケーフト アクト (Geef acht)

→ 気ヲ付ケ

ホーフト=レクツ (hoofd=REGTS)

→ 頭=右

レクツ=ラム (Regts=OM)

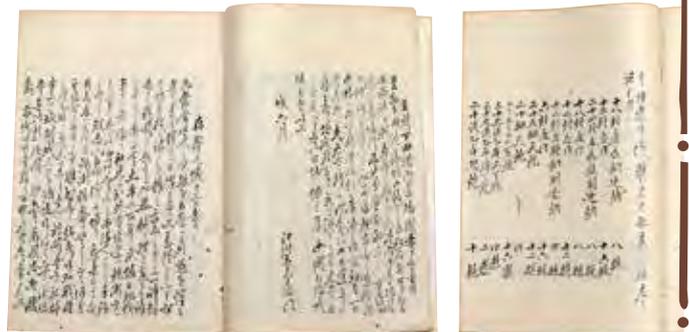
→ 右=向ケ (明治2年以降「右向ケ=右」となる)

レクツ=ラム=ケールト (Regts=OM=KEERT)

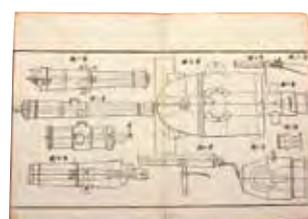
→ 右向=廻レ (明治2年以降「回レ=右」となる)

※ 号令中「=」の記号は、「予告」と「動令」の区分を示すもので、オランダの原書・日本語の翻訳教本に共通して使われている。

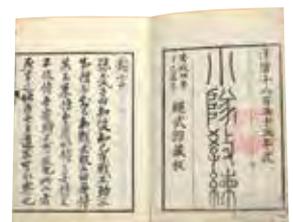
版元となった縄武館は、芝新銭座に開設された江川家支配の兵学塾である。江川坦庵の没後、幕府はその功績を讃える意味から、安政2(1855)年に江戸の浜御殿に隣接した8000坪余の敷地を江川家へ提供し、大小砲習練場の建設を促した。江川家では、第37代当主となった英敏が「御代官御鉄砲方兼帯」の役職を引き継いでその運営にあたり、先代以来の家臣らが実務を扶けた。縄武館はこうした流れのなかで、以前の葦山塾を復興する形で大小砲習練場内に設置され、明治維新を迎えるまで門人をとって西洋兵学を伝授した。



①下田湊防備ニツキ何書



②海上砲具全図



③歩兵運動軌範

## 推薦図書紹介

● RECOMMENDED BOOKS



## The 5-Minute Linguist

Edited by E.M. Rickerson and Barry Hilton  
[Equinox]

この本は、Non-native English Speaker にとって非常に読みやすい長さの小論文が多くまとめられており、書籍名が示す通り、比較的短い時間で、英語で語学学習全般、さらには言語学・英語学について勉強するのに非常によい書籍だと思います。またそれぞれの話題に関して、専門的になりすぎず、良い意味での「つまみ読み」が出来るという意味でも肩肘張らずに楽しめると思います。

本書は、各分野における専門家が50を超える大変興味深い質問に回答をする形で書き進められており、本書で扱われている title を概観しただけでも、Do all languages come from the same source? (全ての言語の起源は同じか?) や Why do languages change? (なぜ言語は変化をするのか?) や How do babies learn their mother tongue? (赤ん坊はどのように言語を獲得するのか?) といった言語学習をする全ての者にとって非常に興味を掻き立てられる小論文だけでなく、Does our language influence the way we think? (言語は我々の思考に影響を及ぼすか?) や What does it mean to be bilingual? (バイリンガル

になるとはどういうことか?) など、複数言語を話すことと、それぞれの言語使用に対する思考の変化の有無について、更には Can you use language to solve crimes? (犯罪解決の為に言語を使うことが可能か?) など犯罪言語学にまで広範に渡る分野についての知識を得られる良書であると言えます。

また、How different are Spanish and Portuguese? (スペイン語とポルトガル語はどう異なっているか?) や Do all Arabs speak the same language? (全てのアラブ人は同一言語を話すのか?) や Is studying Japanese worth the effort? (日本語を学ぶ努力をする価値があるか?) など、英語以外の言語を学習する人にも楽しめる書籍になっています。

最後に、さらに各分野についての知識を深めたい人の為に、各論文の末尾には参考文献の紹介もされており、この本をきっかけに、専門的な書籍へと導いてくれるものと思います。国際関係学部において、語学学習をするみなさんに是非一読して欲しい一冊です。

国際総合政策学科 熊木 秀行



## 日本古典文学大系 全100巻

[岩波書店]

岩波書店の「日本古典文学大系」は上代から江戸時代後期までの古典文学を集めたもので、全100巻から成る。このうち第一期は1957年に刊行された『古事記』から始まり、『風土記』、『萬葉集』、『竹取物語』、『源氏物語』、『枕草子』、『今昔物語集』、『平家物語』、『太平記』、『御伽草子』、『芭蕉句集』、『東海道中膝栗毛』、『浮世風呂』などの66巻を指す。第二期には『日本書紀』、『栄花物語』、『仮名草子』、『浮世草子』などが加えられた。

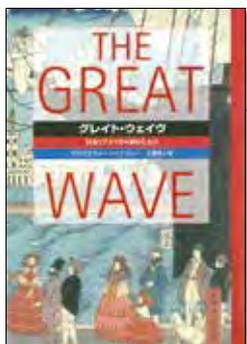
その後、小学館が「日本古典文学全集」を、続いて岩波書店も「新日本古典文学大系」を出し、どちらも見やすくわかりやすい解説がつけられたため、この「日本古典文学大系」は絶版となり、今では古本屋に安く置かれているのを見るだけである。

しかし、このシリーズの、とりわけ第一期の66巻は私にとってかけがえのないものである。生まれた時から家の本棚に置かれて目にしてきたからである。母が大学で国文学を専攻している

ときに配本が始まり、高校教師を退職する1963年3月に『今昔物語集五』が配本され、全66巻が揃った。母は毎月教員室に届けられる本を楽しみにしていたそうである。そして、その全集を嫁入り道具とともに今の家に持ち込んだのである。

歌集や物語の他、謡曲、狂言、俳句、浄瑠璃、歌舞伎、川柳、狂歌、洒落本など、あらゆる古典文学が揃っており、まさに宝の山のようなものである。中学や高校の時、教科書で目にする書物にすぐに触れることができるのが嬉しかった。今でもその一冊を手にとると、いつも心がリフレッシュされるような気がする。社会がどんなに変化しても、時代を越えて伝えられるメッセージは私たちの原点であり、道標と言えるものなのかもしれない。古典を伝統と捉えるのではなく、人間の普遍的な心情としてもっと身近に感じてほしい。

国際総合政策学科 松浦 康世



## グレート・ウェイヴ — 日本とアメリカの求めたもの

クリストファー・ベンフィー 著 / 大橋 悦子 訳 [小学館]

本書のタイトルの「グレート・ウェイヴ」とは、日米を行き来する大波、すなわち作者ベンフィーの言葉を借りると、「日本と西洋の文化的交流を指す」とのことである。それに乗って二国間を行き来した多様な職業の人々が織りなす物語が9章にわたって繰り広げられる。メルヴィルの『白鯨』(舞台は1841年)からはじまり、1913年(明治時代の終わり)に至るまでの間に、日米文化交流にかかわった人物が取り上げられている。

太平洋の両岸を抱いてきたそれぞれの相手に対する思いが、直接接することによりどうなったのか。アメリカ人の見た日本が物語仕立てで語られる。1章、2章という番号だけでなく、作者が加えた「太平洋上の二人の漂流者、ハーマン・メルヴィルとジョン万次郎」、あるいは「貝殻コレクター、エドワード・シルヴェスター・モース」といった、内容を想像させる見出しも興味

をそそる。ここで取り扱われた人物が二十人に及ぶこともあって、記述に若干誤りが見られるものの、作者が主張する「日本の文化的開国」というテーマはゆるがない。

ラフカディオ・ハーンへの言及があるから読みだした本著であるが、作者が特に力を入れているのは、アメリカが独立する前に、祖先がボストン近郊に住みついていた裕福な一族の末裔である。アダムズやピゲロー、ローウェルなど、それぞれ異なる理由から日本をめざし、滞りもバラバラだが、ユニークな視点から日本を欧米に伝えた。と同時に、彼らのプライベートな問題、特に恋愛模様なども赤裸々に描かれている。日本側からは、岡倉天心、九鬼周造、乃木将軍といった人物が取り上げられている。はじめから章を追って読むことはもちろんだが、関心のある人物が取り扱われている章だけを読むことも可能である。

国際教養学科 梅本 順子



## われわれの戦争責任について

カール・ヤスパース 著 / 橋本文夫 訳 [筑摩書房]

国際教養学科 平野 明彦

本書(原題は『Die Schuldfrage(責罪論)』)は、1945-46年にハイデルベルク大学で行われた連続公演の一部を46年にヤスパース自ら編纂したもので、当時ドイツでこそ冷やかな視線を浴びせられたものの、現在、戦争責任を語る上で看過できない論考の一つに数えられている。本書が、戦後70年の節目の年に、新たにちくま学芸文庫として上梓されたことは、同じ敗戦国である日本の戦争責任を考えるにあたって、一つのきっかけを提起するものと言えよう。

著者のヤスパースは、周知のようにハイデガーと並んで20世紀ヨーロッパを代表する実存哲学者であるが、むしろ21世紀の今こそ、現代の最も重要な思想家の一人と見なされている。今年、ドイツ政府がようやく重い腰を挙げ、ハイデルベルク学術アカデミーを中心に、全50巻におよぶヤスパース全集の刊行(完成は18年後の予定)が決定したのもあって偶然ではない。むしろ爆発的ではないものの、所謂「文明の衝突」に象徴される21世紀の政治的混迷を打開する指針として、アレントとともに、

世界各国でヤスパースの思想が再評価されつつあるからである。

次に本書の概要について、加藤典洋氏の簡潔な解説から引用する。「ヤスパースは、第二次大戦敗戦直後、「敗戦国民の責任の取り方を論じた。曰く罪の種類を刑法上の罪、政治上の罪、道徳上の罪、形而上的な罪に四分類し、刑罰の対象を個人レベルに限定しつつ、国民全体としては侵略の歴史を保持し続けることで罪を償うというもの」。さらに注目すべきは、ここでヤスパースが強調しているのは、ただドイツ人に戦争責任を認めさせることではない、という点にある。むしろ彼が望んでいるのは、互いに胸襟を開いて忌憚なく語りあうことであり、しかも「ひとまず相手方を認め、内面的に試みに相手方の立場に立ち」、「いやむしろ自分と反対の説を大いに捜し求め」ようとするのである。それは、一方でソクラテスの〈対話の精神〉に由来し、他方でカントの啓蒙における〈理性の公的使用〉を正しく継承したものに他ならない。



## アファンの森の物語

C・W ニコル 著 [アートデイズ]

ビジネス教養学科 川戸 秀昭

ウェールズで生まれた著者は、1962年の初来日以来、日本の自然を愛し、文化を敬愛し、日本の未来を日本人以上に憂い、貢献してくれた人物である。私がナチュラリストという言葉で中学生の時分に初めて知ったのも彼の影響からである。私は彼の人間も自然の一部であり、特別な存在ではないという考え方に共感し、彼の著作を読み漁り、メディアに出る際は全てチェックするようになった。捕鯨問題から料理に関することまで多岐にわたり教えてくれた師匠のような人物である。彼が長野県黒姫に土地を購入し、生活するようになって35年ほどが過ぎようとしているが、その間に彼が目標としてきたのは、美しい森を作り、それを日本の国に返すことだった。95年には日本国籍を取得し、日本国民となった彼はその森をアファンの森と名付け、財団法人の承認を受ける。こうした活動が母国イギリスにも伝わることとなり、2008年にはチャールズ皇太子がアファンの森を

訪問することとなる。ウェールズ出身である著者にとってプリンス オブウェールズの訪問は大変な名誉であった。この訪問をきっかけとして、世界中の人々がアファンの森を知ることとなり、彼の活動にも注目が注がれることとなる。そして、それは天皇后陛下が著者と個人的にお話をしたいとご要望されるまでになった。故郷の皇太子に帰化した国の天皇陛下とこの上ない至福の時間を持つことができた著者は、ますます森を育てる活動に注力していく。そうした著者の様々な想いが詰まったこの図書は日本の人々に是非とも読んでもらいたい一冊である。人間がこの地球上に存在し、空気を吸い、水を飲み、自然からの恩恵を存分に享受できるのは森のおかげである。生命の根源ともいえる森の存在を忘れてきている現代の我々日本人には非常に大切なことを思い出させてくれるであろう。



## 昆虫はすごい

丸山 宗利 著 [光文社]

食物栄養学科 小柳津 周

本書は、「昆虫」の知られざる能力や多様性について幅広い視点で解説されていることから「昆虫」に対するマイナスのイメージを改善できるものと思います。

「昆虫」の行動の大部分は遺伝子に刻まれた本能の現れであり、学習によって得ることの多いヒトの行動とは根本的に異なると考えられる。しかし、日常生活の中で起こりうる突発的な行動や感情に見られるヒトの普段の行動も多分に本能に支配され、生物としての営みは「昆虫」のような一見、「下等」な生物に共通する部分も非常に多いと著者は書いている。あまり褒められた表現ではないが「虫けら」という言葉がありますが、本書を読み進めると「昆虫」に備わっている高度な機能や能力に感心し、腑に落ちてしまう行動も多々あり、うなずきの連続でありヒトの世界にも共通することも多く、見下した表現に使用する言葉としては不適切であると実感させられます。

本書は四章で構成されています。例えば、贈り物作戦では、「オドリバエ」(名前のように踊るように群飛する)の雄が配偶者を得るため、あるいは気を引くため雌に贈り物作戦を敢行するという内容です。贈り物は当然ですが、エサです。時には見せかけ

の空のエサを贈り物として差し出すこともあります。涙ぐましい努力であり、ヒトの世界にも共通する行為でもあるように思います。次に摂氏百度のおならです。摂氏百度のおならでは、ミイデラゴミムシ(ミイデラは漢字で三井寺と書きます)が主役です。このミイデラゴミムシが発するおならですが、生体内に摂氏百度で存在するおならではありません。生体内に摂氏百度の物質が存在していたら虫は即座に死んでしまいます。このおならの発生には、化学反応を巧みに用います。腹部にヒドロキノンと過酸化水素という二種類の化学物質を貯蔵し、危険を察知すると両化学物質を腹部先端の器官に流し込み酸素と反応させ、爆発させて強力な熱エネルギーを発生させるのです。その際にベンゾキノンと水が合成されて強力な臭気も出します。ヒトでもおならを我慢することは大変苦痛ですが、ミイデラゴミムシは生命を守る行為なのです。このように「昆虫」が持っている何気ない機能性や行動をヒトの行動や機能に重ね合わせて読み進めると、何とも愉快であり憎めない「昆虫」ワールドを覗き見ることができます。是非、ご一読をお勧めしたい一冊であると考えます。

## STUDENT'S VOICE

## 大学での気楽で知識を得られる場所

大学院国際関係研究科 博士前期課程 2年 欧于華

大学はいつでも賑やかで、青春の気分を感じられる場所だと思います。たまに静かな雰囲気に浸りたいなら、やはり図書館です。初めて図書館を利用した時、分からないことは、パソコンの使用法から図書館のウェブサイトまで貸出延長の仕方まで、職員の皆さんが優しく親切に教えてくださいました。

私は母国の大学で勉強をした時、よく図書館で過ごしました。時には書庫で本を探しながら歴史と共に歩んでいるような、まるで時間が止まっているかと思うような瞬間もありました。日大三島の図書館にも同じ雰囲気があります。エアコンが効いて快適な空間ですし、周りの学生は熱心に勉強していて、自分までも励まされるような気がします。

最新のニュースやデータを手に入れたいなら、一階の雑誌コーナーで各国の学術雑誌や新聞が読めます。また、必要な資料やデータがあれば図書館のコピー室で印刷もできます。アジア地域の社会研究をしている私にとっては、とても便利なことです。図書館の二階へ行くと、書庫には日本の統計年鑑や厚生労働省の白書などの専門書が多く並べられ、欲しい資料が探せる広い空間です。さらに、図書館のウェブサイトを利用すると世界中の新聞を見ることが出来ます。また、勉強に疲れた時や気分転換したい時には映画も鑑賞できます。

ところで、国際関係を学んでいる私達にとって、世界中の人々と接する時、語学力が高ければ高いほど誤解を減らすことができると思います。国際

関係学部には留学生が多いので、ある程度の日本語と日本文化を理解している留学生と日本人学生が自由に会話できるチャット室があると便利ではないでしょうか。一対一の予約制にして、だれでも留学生と会話できる場所。英語のチャットだけではなく、他の外国語の入門者もチャットできます。異文化の理解のみならず、お互いの語学力向上にも役に立つと思います。

無料で知識や見聞が広げられる場所は図書館だと思います。実際に、私が三島へ来た時、初めて利用した図書館は三島市立図書館でした。校内の図書館だけではなく、市立や県立の図書館も利用したらどうでしょうか。時折、館内の市民活動で音楽が流れてきて、穏やかな雰囲気にもなります。

読書の習慣がない人にとっては、最初は辛い感じがあるかもしれませんが、少しずつ積み重ねていって、慣れたらとても幸せなことだと思います。大学で図書館を利用して自分を磨き、充実した学生生活を送って、社会へ出たら公立の図書館を利用しましょう。「学び」は一生のことだと考えています。



▲市立図書館近くの水路にて

## 国際機関資料室から

INTERNATIONAL DOCUMENTATION CENTER



日・EUフレンドシップウィーク2015

## 「写真で見る現代のオランダ」展 開催

EU情報センターを併設している国際機関資料室では、毎年5月9日のヨーロッパ・デーを記念して、日本とEUの交流を目的とするイベント「日・EUフレンドシップウィーク」を開催しています。

今年は、5月9日(土)～5月29日(金)まで、図書館1階閲覧室及び国際機関資料室にて、「写真で見る現代のオランダ」と題し、オランダ王国を紹介する展示会を開催しました。

オランダ政府観光局が提供する同国の美しい風景や日常を垣間見ることができるポスターや写真、約100点を展示しました。また、オランダの基本情報や1600年のリーフデ号の漂着に始まる日本との交流の歴史、ミッフィーやサッカー、ゴッホなどオランダの3大画家の作品等も館内の所蔵資料で紹介しました。

国際機関資料室のグループワーク・エリアでは、チューリップや風車、自転車等、オランダらしさが溢れた写真を解説付で展示。また、最新号の雑誌を閲覧できる図書館の新聞・雑誌データベース「プレスディスプレイ」より、オランダの雑誌の切抜きを掲示し、最新のオランダを見ていただきました。

また、恒例のクイズでは、展示資料に関連した問題を出題し、正解者には駐日欧州連合代表部から提供いただいたキティちゃんストラップやUSBネックストラップなどのEUグッズが当たるくじ引きも用意しました。

今回は、オランダをテーマに、その知られざる魅力を紹介できたと思います。今後も、EUやEU加盟国について、興味深い内容のイベントを開催して参ります。



日本大学国際関係学部図書館ニュース

BIBLIOTHECA

第11号

通巻第156号

発行日／2015年10月1日

編集・発行／日本大学国際関係学部  
図書委員会<http://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/>